

第5章 本研究のまとめ

千葉大学教育学部教授（研究会座長） 明石 要一

①「体験活動」をなぜ問題にするのか

本研究会は「子どもの体験活動の実態」を明らかにすることを目的にしている。具体的には子どもの頃の体験が子どもの成長にとってどんな体験が大切か、を明らかにする。それはなぜか。理由は二つある。

一つは、「体験格差」が子どもの学力格差を生む社会状況になってきているからである。経済格差が直接に学力格差を生むのではなく、経済格差が体験格差を生み、それが学力格差をもたらすつながりができあがっている。しかし、今子どもの体験活動はどうなっているかの基礎調査が乏しい。子どもはいうまでもなく、大人世代の子どもの頃の体験活動はどうであったか、のデータも不足している。

二つ目は、体験は子どもの成長に欠かせない、体験をするとひとかどの人間になる、という言葉がある。しかし、子どもの成長にどんな体験がよいのか、その体験は何時の段階にすればよいか、そして、体験を通してどんな力が身につくのか、さらに、子ども時代に豊かな体験をした者は大人になったときどんなインパクトを与えるのか、という課題に答える基礎調査がない。

②研究会が用意した問い (Q) と答え (A)

1) 子ども頃の体験は、大人になったときどんなインパクト（教育的な効果）を与えるのか

成人調査から答える。

◇子どもの頃、「自然体験」、「動植物とのかかわり」、「友達との遊び」、「地域活動」、「家族行事」、「家事手伝い」といった体験が多いほど、大人になってからの「自尊感情」、「共生感」、「意欲・関心」、「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」といった「体験の力」が高い。

6領域の体験を分けているが、それらの多くの項目は7領域に分けた「体験の力」と関係していることがわかった。これまでの研究では、体験活動と「規範意識」は関係がある、という知見はあったがこれほどの総合的なアプローチでの結果は初めてである。

2) 子どもの頃のどの時期にどんな体験をすれば効果的か

子どもの頃の体験と大人になってからの体験の力の結びつきを調べた結果、次のことがわかった。

- ・小学校低学年までは「友だちとの遊び」と「動植物とのかかわり」が体験の力に関係している。
- ・小学校高学年から中学生までは「地域活動」、「家族行事」、「家事手伝い」等が体験の力に関係している。

「体験」はいつでも効果的とは限らない。子どもの成長に合わせた「体験活動」があるようだ。今後はこの知見を踏まえた体験活動の提供が求められる。「卒啄（そったく）の時」という諺がある。雛が内から殻を破ろうとする鳴き声に答えて親が外から殻をつついてあげる、という意味である。ベストチャンスがあるのである。

3) 子どもの頃の体験は、大人になったとき社会的な地位に影響を与えるのか

子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い、という結果がある。

◇子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い。その体験は、次のとおりである。

- ・「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりした」
- ・「海や川で泳いだ」
- ・「米や野菜などを栽培した」
- ・「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえた」という積極的な自然体験をした者である。

また、「弱い者いじめやケンカを注意した」り、「かくれんぼや缶けりをした」、それから「地域清掃に参加した」、「家族で家の大掃除をした」、「家族の誕生日を祝った」等をしている。

◇青少年施設や社会教育施設を利用した者ほど、最終学歴が高い。

◇お稽古・習い事をした者ほど、最終学歴が高い。

◇子どもの頃の体験が多いほど年収が多い。その体験は、次のとおりである。

ここでも積極的な体験が大きなウエイトを占める。それ以外では、おしくらまんじゅうのような遊び体験や、地域の人に叱られた、地域掃除に参加したという地域とのかかわり等があがる。

◇最終学歴、年収という社会的な地位の形成と関係している体験はほぼ同じ結果を得る。

4) 子どもの頃の体験は社会生活にどんな影響を与えるか

◇体験が多いほど、そうでない者に比べて、結婚している割合が多く、子どもを二人以上持っている。

◇体験が多い者ほど一ヶ月に読む本の冊数が多い。

5) 青少年調査から何が言えるか

青少年調査でも、成人調査とほぼ同じ結果を指摘できる。

◇幼少期から中学生期までの体験の多寡は、高校生の「体験の力」に関係している。

◇体験が多い子どもほど、本を読んでおり、コンピューターゲームやテレビゲーム遊びが少ない。

◇「自然体験」、「動植物とのかかわり」、「友だちとの遊び」は高校生と比べると中学生の方が少ない。

中学生の方がこうした体験が少なくなる。しかし、「家族行事」では高校生より、中学生の方が多く体験している。他のデータからも同じ結果が伺える。不況の影響で家庭での団らんを含めて家族行事が増えているようだ。家庭回帰の兆しが見え始めているのかもしれない。

6) 因子分析による新たな知見

子どもの頃の体験 30 項目及び、「体験の力」35 項目を因子分析した結果、次のことがわかった。

◇成人と青少年では、項目を構成する因子*（以後「かたまり」と表現する）が異なる。

・子どもの頃の体験 30 項目について

成人調査では「自然体験」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり、次が「家事手伝い」に関する項目、三番目が「地域活動」に関する項目である。

また、成人調査ではこちらがあらかじめ想定した項目同士が同じ「かたまり」を示した。例えば、「自然体験」の項目で、「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見た」、「太陽が昇るところや沈むところを見た」、「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりした」、「湧き水や川の水を飲んだ」、「海や川で泳いだ」は同じ「かたまり」をつくっている。

青少年調査では成人調査とは異なり、「家事手伝い」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり、次が「自然体験」と「動植物とのかかわり」に関する項目（ミックスされている）、三番目が「地域活動」に関する項目である。

・「体験の力」35 項目について

成人調査では「規範意識」に関する項目が第一に「かたまり」をつくる。それら項目は社会通念上、常識と呼ばれる事柄である。次が「人間関係能力」に関する項目、三番目が「意欲・関心」に関する項目である。

また、青少年調査では第一因子は「規範意識」を中心とした常識に関する項目が同じ「かたまり」を示した。次が「共生感」である。三番目に「人間関係能力」が来る。

「自尊感情」では成人と青少年は若干意味が異なる。成人は「自分、家族、学校、地域、

日本」が一つの「かたまり」をつくるが、青少年では「自分と家族」の「かたまり」と「学校、地域、日本」の「かたまり」で分かれている。

※因子とは、「因子分析」という統計技法を用いることで、得られる。因子分析は、多数の項目間の関係等によって「かたまり」をつくり出す。それによって、心理尺度等の全体的特徴を理解しようとするもの。

③残された課題

- 1) 体験の持つ意味の量的な側面はかなり発見できた。次は「質的な側面」の解明である。具体的には、特定の人物を対象に量的調査で得られた知見を検証することである。
- 2) 成人調査と青少年調査では、ほぼ同じ傾向が認められた。しかし、「体験」の持つ意味が異なる側面も見いだされた。これからは、具体的な体験がどのような「かたまり」を形作り、それらから身につくであろう「体験の力」の「かたまり」はどのような年齢ステージごとに明らかにしていく必要がある。
- 3) 日本の「体験」と諸外国の「体験」は同じ意味を持つのか、の比較検討が必要だ。「体験の力」では規範意識を中心とした常識が中核をなしているが、これは国によって異なる。特殊的なものや普遍的なものをはっきりさせなければならない。